

第5回 蘇東坡は「手本は范仲淹」を高らかに歌った

はんちゆうえん

—— ただ 但恐る じょうし 城市は歎び、 でんや 田野の愴む いた を知らざるを

2016年9月8日（木）。

台風13号が午前中にかなり接近するかもしれないという昨日の予報であった。だが、朝起きると青空が見え、日も射していた。

この日は仕事が休みで、トバー君の話を文字化する作業を予定し、雨なら集中できていくくらいに思っていた。案に相違してだらだらやっている、10時ごろに大きな声をあげて子供たちが外の道を駆け抜けて行った。後で聞くと、台風に向けて今日はあらかじめ休校になったということだった。

トバー君が雄弁すぎるのだろう。音声データはなかなか消化できない。1カ月ほど前に受け取ったものにやっと手が付いた。午後にはうんざりし、パソコンの前につつぶしている、コツコツと窓がたたかれた。はっと顔をあげた瞬間の心の内が表情に出してしまったのだろう、

「やっぱ、きたらまずかったかなあ。だったら、ほら、これだけ置いて帰ろっかなあ」

網戸の向こうでちよつと意地悪そうな顔を作って、ICレコーダーを突き出した。それこそがいまきてほしくないものだ。

「いえ、きてくれてうれしいですよ。ちよつと久しぶりじゃないですか。ちよつど、目覚ましにコーヒーが飲みたいかなあって思っていたところですよ」

イノ君はいつものように玄関から入ってきて、いままで私がいたイスにすわり、

「やっぱね、そうだろうなああって思ったんだ。この前のがまだぜんぜんなんだよね。これって、諸葛孔明しよかつこうめいの詩だ。さつき、『あつ、やばっ！』って顔してたもの」

「別にやばくなんかありませんよ。楽しみながらやっていますよ。専門家ではないので、音声を文字に直すのにちよつと時間を要するということだけです。そろそろ次の回の方がきたらいいなああって思っていましたよ」

「ふーん、そうなのかなあ」

「このごろイノ君はちよつとこなかったですよね」

「あのさあ、おじさんって、小学生のころ、夏休みの宿題はいつごろやってた？ ぎりぎり8月の終わりだった？ それとも夏休みに入ってすぐだった？ どっち？」

「いきなりなんの質問ですか？ どっちって、宿題帳を毎日1ページずつきちん

と進めたという選択肢がないのはおかしくくないですか」

「それはB型の叔父さんには絶対にないとわかってるもの。気が向いたらばつとやるか、そうじゃなかったら、ほつたらかしかどつちかだよ。机を見たらわかる。見えるところはきちんと片付いているようだけど、ひきだしのなかは、ほーら、やっぱぐつちやぐつちやだね」

「わざわざあけのぞかなくてもいいですよ」

「夏休みの宿題のやり方でその後の人生がわかるって話があるよね。この間も、そんなのがどっかに書いてあった。計画的に宿題をしていた子は大人になってからも計画的に仕事をして社会的信頼を得るけど、そうでなかった子はギャンブルに手を染めたり借金まみれになったりして社会的信頼を失うって、そんな調査結果があるらしいよ」

「本当ならかなり恐い話じゃないですか」

「叔父さんは前者ではないのは明らかだから、社会的信頼はどうなのかな？」

「二者択一ってことではないでしょうに」

「三択にしたっていいけどさ、二つが三つになっても、『三つ子の魂百まで』って言うから、三つ子の兄妹は100年生きてても結局はおんなじってことだよ。つまり、すべては遺伝子で決まってるってこと。だから血液型なんだよ」

「それって話がずれていませんか。ことわざの三つ子は3歳の子ですけど。遺伝子で決まってるって話は、ふだんはきらっていたのではないですか」

「叔父さんがB型人間だっていうことを除いてはね」

「血液型はともかく、宿題は夏休みに入って早めにやっってしまうことが多かったかも。日記もあらかじめ書きちゃって、あとは天気を入れるだけみたいな、超計

「画的な年もあったと思います」

「きらいなものを先にぱくぱく食べて、あとは安心してをゆっくり好きなもの食べるのとおなじだね。要するに叔父さんは『臭い物にはふた』で、そとづら外面をよくしたがるんで、この机と一緒だね」

「話がとつちらかってませんか？」

「じゃあ、ここらで整理して、すぱつと結論を出すと、トバー君の話は二重の意味で叔父さんの負担になっていて、さっきあんなにいやそうな顔をしたってことだよね」

「どういうことですか？ いやそうな顔をしたつもりはないんですけど」

「隠そうたってムリ、ムリ。ひとつは、外面を気にする叔父さんとしては、ぼくちん仕事が速いもんねってところを見せたいのに、トバー君がやたらとしゃべ

るんでシツクハック症候群になつてること。もうひとつは、中国の歴史は自分こそが詳しいはずという自負があるのに、なぜかボクがトバー君と親しくしているのが悔しいってんで、しつとりタイプの化粧水になつてることだよね」

「いまのは四苦八苦とシツクハウス、嫉妬としつとりのダジャレでしょうか？

いつからイノ君はおやしギヤグを言うようになったのですか？」

「うちのリーダーが、利用者さんに向かつて、チョークだらしないダジャレをよく飛ばすんだけど、それが意外とうけたりするんだよ。それで、DDF、伝染性ダジャレ熱ってやつかもね」

「Fだけがフィーバーで英語なんですか。SHS、シツクハック症候群の実態は、まさにイノ君がいま見ているそれってことなんです。それは作業を始めたばかりなので、ホームページにアップしたものを読んでみてくれた方がいいんですけ

ど。グールグルかヤッホーで『蘇東坡自伝』の一発検索で出ますよ」

「へーえ、じゃあ、見てみつかない」

「そういえば、イノ君には事前の了解なしにアップしちゃったんですけど、よかったですかねえ？ 最初からばりばりにイノ君が登場してるんですけど」

「ああ、ホントだ。前の知事のこととかボクがしゃべってんけど、もうネタが古いよね。こんなの載せる必要がある？」

「ホームページに出したらいいって勧めてくれた経緯を載せておこうかと思って。当の本人の了解を得るべきだということに頭がまわらなくて、いけなかったですかねえ」

「気にしてくれなくていいよ。どうせ、だれも見ないんでしょう？ それに、これを読んで、イノ君ってという人の実在性を信じる人ってあんまない気がする。



言葉遣いが乱暴すぎて、いかにも作りましたって感じがするじゃん。〇〇が5番目の職場だっていうのだって数が多すぎてウソっぽいやね。数字を出すと信憑性が増すってことがあるらしいけど、これは逆効果だね。あの老舗旅館にAKBの全メンバーが泊まるっていうのは法螺話として出来が悪すぎだよ。そんなこと言うバカはどこにもいないよなあ。『三泊四日五時の鐘』の映画だって、あそこに泊まっていたのは10人くらいで、それが限度だよ。つまり、どこをとつてもリアルさに欠けて、イノ君っていうのは作者がでっちあげた架空の人物だっていうのが見え見えで、しかも失敗作だよ。だから、ボクとは無関係なんで、どんなふうに書いてあってもちつとも構わないよ」

「これでありのままなんですけどねえ。架空の人物を作るんだったら、もつとぶつうにありそうなまともな人を書きますよ。ありそうのないのをあえてそのまま

にしておくところこそが本物の証なのではないでしょうか」

「最もありそうにないのが本物だつていう理論はボクがこれまでに何度も言っていることだよ。つまり、トバー君が真正銘の蘇東坡だつてことだけが真実なんだよね」

「そうなりますかねえ」

「いまね、『最も』つて言ったのが実は重要で、そこところがトバー君が本物であることを保証してるんだ。ここに登場するイノ君とかいう人は中途半端のありえなさなんで、ごくつまらない架空の人物としか思えないんだよなあ。それはとりもなおさず、ボクが常々自分の実在性を疑っていることとぴたつと合っているんだよ」

「また話がとつちらかってきましたよ。もしも、そこに登場するイノ君が架空で

非実在だとしたら、目の前にいるイノ君はいったい何者なのでしょうかねえ。そして、そのイノ君と話をしている私も実在性が疑われるってことになってしまうのでしょうか？」

「それでいいんじゃないの。つまり、実在性はネット上にのみあるってことだよ。ね。これが21世紀の真理だよ」

「飛躍しすぎじゃないですか」

「つまり、結論を言い直すと、そこにいるかに見える叔父さんは実在しないんだから、さっき言った二重の負担に苦しむ人はいないんだよ。だから、叔父さんは気安く次の新しい録音をにこにこ顔で受け取ればいってことだよ。はい、どうぞ」

「このICレコーダーこそが非実在なら楽チンなんですけどね。現実世界にお

いては、この前の分を早くアップしないといけないってことですよ。夏休みの宿題を終えられなくて、その後の人生は借金まみれになってもいけないですからね」

「そこなんだよ。現実世界において最もリアルなものといったら、マネーの数字なんだ。ボクもようやくそのことに気づいたんで、この前、通帳の数字をじっとにらんでみたんだよ」

「介護の仕事をよく頑張って、もうすぐ1年半になるので、いくらから貯金ができてきたりしましたか？」

「そこまではムリ。だって、ボクらの職場って、昔から3Kとかって言われてんじゃん。このごろは、きつい、危険、きたないの3Kに加えて、給料が安い、休暇が少ない、カッコ悪いで6Kとかあるらしいけど、カッコ悪いかどうかは主観

によるから別にすると、介護の仕事は確実に5Kにはなるよね。収入が極めて限定されてるんで、支出はどうしたって限られるってことで、あんまし出る方は気にしてなかったんだよ。ボクには服とか買う趣味はないし、スマホもないし、あんまし心配してなかったんだけど、リアルな数字は結構ヤバいかもってことなんだ」

「へーえ、赤字ですか？」

「問題の所在は明らかで、〇〇なんだよなあ」

「あそこの支払いくらいなんでもないって、この間は豪語してなかったですか」

「そりゃあね、1回の支払いは大したことないんだよ。だけど、積もり積もって合計するとやっぱバカにならないんだよねえ」

「そりゃまあそうでしょうね」

「こうなったら、これからは、袋作戦で行くしかないかって思ってたんだ」

「どういう作戦ですか？」

「叔父さんは知らないかなあ。トバー君から教わったんだけど」

「ふーむ、わからないですけど」

「どっかに流されたときに、さっそく困ったのがやっぱリアルな通帳の数字だったんだよね。優秀な高級官僚として、それまで家計の心配なんかまるつきりしたことなんかなかったんだけど、流罪になれば、それこそ、カツコも悪くて6K職場とおんなじだね。入ってくるのは限りなくゼロに近くなってしまっただけで、それで考えたのが、1日に使ってもいい金額をあらかじめ袋に小分けして、1日にひと袋だけ開けるってことにしたんだ。ボクもその手を使おうって」

「ああ、何かで読んだかも。竹筒に入れたのではなかったでしょうか。イノ君の

場合に1日に使ってもいい金額ってどれくらいですか？」

「ボクにきかなくなっちゃって、叔父さんならわかるでしょう。常勤でも非常勤でも時給はそんなに変わらないんだから。それでさ、袋に分けちゃうと、〇〇なんかには絶対に行けないよね。そうになると、ボクもつままないし、叔父さんも困るよね。叔父さんとこのこのチャチなホームページの閲覧回数が増える見込みがなくなってしまうからね」

「別に構いませんけど」

「やっぱりこの録音は続けないといけないんだよ。それでね、〇〇に行くための袋を別に用意して、日々の袋から余りがあつたらそこに入れるってことにしようかなあつて思ってたんだ。ボクって、夏休みの宿題を毎日コツコツやる人みたいになつていい健気だと思わない？」

「それだと、どれくらいの頻度で〇〇に行けるってことになるでしょうか？」

「やってみないとわからないよなあ。1カ月に1回はかなりムリかもしれないけど、2カ月に1回か3カ月に1回か、なるべく叔父さんを楽させないようにしたいと思ってる」

「テキトーにやってくれていいですよ」

「だから、ボクはテキトーが苦手なんだよなあ」

「それはそれでいいとして、ふと気になったんですけど、姉さんがもし私のホームページを見たら、なんかまずいことになったりしないでしょうか？」

「どういうこと？うちの母親が、まさか叔父さんのホームページを見たりなんかしないと思うよ」

「万が一に見てですよ、トバー君っていう人と頻繁に会っているのを、ヘンに



思ったりしないですかねえ」

「ヘンに思ってくれたらチョーうけるんだけど。相手がじいさんでもさ、いよいよあの子にも恋人ができたって、喜んだりなんかして。笑えるよね」

イノ君は母親についてあれこれ並べたのだが、そんなことを書いて我が姉が読んだらそれこそトラブルになりかねないので、ここまでとしておく。

**今夜**こそは都への旅を終わらせましょう。話を始めてこれで4回目、年寄りの思い出話がいつまでも同じところにとどまっただけではさすがに退屈でありましょう。青春のノスタルジアというものなのでしょうか、話しつついろいろな思いが湧いてきて、つい寄り道が多くなつてなかなか進みません。

ここまでの旅の詩は、父と弟と3人の詩をまとめた『南行集』なんこうしゅうにあるものです。『南行集』を編んだとき、これはかつて類のない詩集だと、私には秘かな自信がありました。いえ、鼻持ちならぬくらいに露骨であったかもわかりません。その自信はいったいどこからきたのでしょうか。諸葛孔明を批判しました。科挙に合格しただけで早くも国家を背負って立っているような気になっていたのでしょうか。詩では向う見ずにもさまざまなテーマに挑み、かなりの背伸びをしました。それらのどれが我が身の丈に合ったものだったのでしょうか。

——あのですね、そんなふうにいる並べるのって、一種の照れ隠しだったりするのかもしれないけど、「昔はこれでもギターを抱えてフォークとか歌っていたんですけど、いまじゃあこんなのですよ」って、はげた頭をたたいて自虐的気味に

笑ってみせたりするおっさんと同じで、自慢80パーセント、感傷18パーセント、後悔2パーセントで、ほんの少しだけ針で自分をつつきながら、いい気分にはいたりただけなんだろうなああって思わせてしまっただけで、あんまりよくないよ。余分なことを言わずにさらっと流してくれたほうがずっといいんだよなあ。

㊦ あなたはだんだん手厳しくなってきました。たしかに、ぐだぐだ並べるより、実際にギターを弾いてフォークを歌ってみたらどうなのってことでしょよね。大事なのはいまなのですから。

——まあ、そうかもね。

Ⓣ しかし、私はギターをやったことはありませんし、世に名高き音痴でありますから、残念ながらフォークは歌えません。

——別にそこまでしてくれなくていいんで。フォークはあくまでもたとえだから。「遊たびの奇絶」を聞かせてほしいと頼んだのはボクなんだから、思い出話をばんばんやってくれていいんだよ。

Ⓣ 歌というのは不思議なもので、昔流行ったものを聞くと、一瞬にしてそのころのことが心に浮かんでくるということがよくあります。あなたは若いからそんな経験はあまりないでしょうか。歌とは全然関係のないことまでもあれこれよみがえってくるのですから不思議です。

——介護の世界でいうと、音楽療法っていうのがあるよ。認知症が進んでしまった人も昔の歌とかを聞くと、記憶がよみがえったり、認知機能がアップしたりするらしいね。実際に、歌っているときの顔って、ふだんとがらっと違っていきいきとして、ボクの叔父さんなんかはそういうのを見ると、ぐつとくるって言うんだ。ボクはまだそれほどまでには感じないけどね。そういうボクも、讚美歌を聞くときぐつときちやうこがあるんだ。ボクにはまるつきり似合わないけど、カトリック系の幼稚園だったんで、たぶんそのころの感情と結びついているんじゃないかなあつて思うんだ。

## ④

音楽は昔の体験を思い起こさせるだけでなく、自分が経験してもない遠

い昔の素朴な時代の人間の心呼び覚ます力もあるという説もあります。

——へーえ、そうなの？

㊦ この前は省いたのですが、そのようなことを歌った詩もあります。横道にそれませんが、構いませんか。

——話したければ、どうぞ。

㊦ 船の旅を、戎州じゅうを通過したあたりにもどします。ある日のこと、冬とは思えないほどに暖かく穏やかな天気恵まれて、そのまま夕暮れになってもあ

かも春の宵のようで、我が父は興に誘われるがままに、船上で、当時はギターなどはありませんから、同じく弦の付いた楽器として琴を奏で始めました。船の旅が便利なのは琴のようなものも携えて移動できたことでした。

川岸につないだ船の上、

父が奏でる琴の音に、襟を正して耳を傾ける。

夜が更けるにつれ、

我が心のうちが次第に高ぶってくる。

琴の音は、

松を吹く風、あるいは山にかかる滝、

清らかさを窮めるかと思えば、

ほうぎょく

宝玉が当たるように、からころと愛すべき音を響かせる。

遠い昔に生まれたつましくみやび雅な音楽が、

いつしか快感を呼び起こす淫らな楽曲にとって代わられて、  
太古の楽器の数々がすたれてしまった。

幾千年を経て琴だけが残り、

老いた仙人が世の興亡を閲しつついまも生きるかのようだ。

世間の人々は昔に返るのを好まず、

新しい曲を作っては、

琴に無理強いをして演奏してきたので、

本来のひそやかな音はことごとく崩されてしまった。

それでも非情の存在である琴はいまなおここにある。



いしにえの人々の心はずでに遠く彼方に墮ちてしまったのか。

川の上に広がる廣大無辺の空に月が昇り、

人々の暮らしが立てる音がすっかり途絶えた真夜中に至って、

父は太古の音楽をその当時のままに奏で始めたのだった。

父はこのとき、周しゅうの文王ぶんが作曲したされる「文王操」という曲を演奏しました。

文王は孔子こうしが最も尊敬した理想の人物でした。そんな遠い昔の曲がそのまま伝わってきたわけではありません。父が弾いたのは、後人が復元したものに、自分の思うところを加えた曲であったのですが、父は、それこそが太古の人々の心をいまよみがえらせるものであると確信していました。

——それはどんな曲だったの？ トーバー君は弾ける？

① 弾けなくもありませんが、それこそ「これでも昔はフォークをやっていた」のレベル以下で、まあ、やめておきましょう。

我が父はすべてにおいて独学の人で、琴も人が弾くのを聴いて、習うわけでもなく独自の演奏法で弾いていました。音楽に対する見解も独特で、その根本は歴史学と同じで、古くから伝わるさまざまな曲を顧みることによって音楽の本質が知れてくるということ、父が得た結論をごく単純化すると、音楽の始まりは、いにしへの聖人が自然の声を聴いて、それに似せて、人間の心を元来の正しい状態にもどす働きをするように作った調べであったというのです。大自然のなかで、滝の音を聴く、あるいは風の音を聴くと、心が洗われて、何か自分が純化されて変わ

ったように感じることがあるでしょう。それと同じような作用を音楽がするとい  
うわけです。

——自然の声の模倣が音楽の始まりだというのは、そうなのかなあって気もする  
けど、人間の心を正しい状態にもどすっていうところは、どうなんだろう。「正し  
い状態」は何かというところでもかなり議論があるかもね。話がさらに横に行っ  
て、またいつものジョン・クレアを持ち出すことになって悪いんだけど、こんな  
ふうには始まる詩があるんだ。

野と畑の詩神よ、ミューズ 何度もぼくは貴女に、あなた こんなに永らく

愛してきたぼくの親友でさえあるあなたに、さよならを告げて

あなたの美しいハープを藪の多い谷間に吊るしてしまった。

もっと巧みな歌人うたびとの手が、もっと巧みにかき鳴らすようにと。

(森松健介訳 47ページ)

ジョン・クレアは自然のなかにいると、詩を歌いたくて、つまりハープを奏でたくて居ても立ってもいらなくなるんだよ。でも、自然のすばらしさに適うようにハープを弾けないんで、谷間に置いてしまおうとするんだ。それでも、やっぱり弾きたくて仕方がないんだ。ハープを弾くのは喜びでもあり、苦しみでもあるんだよね。つまり、何が言いたいかっていうと、自然から得るインスピレーションっていうのは、音楽であれ、詩であれ、悟りみたいなものであれ、なんかどろしたようなものもあって、「正しい状態」とは言いにくいようなことだって

あつたりするんじゃないのかなあつて思うんだ。えーと、もしかして、話がずれちやつたかなあ。

① 「どろどろ」ということでは、心をとろかす淫靡な音楽もあります。それだつて自然の声を模倣したところがないとは言えないでしょう。我が父は、酒の座において、美しい女性が奏でるようなやわらかな調べは、音楽としては墮落したものであると、まことに堅いことを言いました。私は嫌うことなく、妓女たちに所望されて、遊びの里で流行する曲に詞を付けたことも何度かありました。

——トバー君ならやりそうだなあ。やっぱ軟派だよな。さつき「老いた仙人が世の興亡を閲しつついまも生きるかのようだ」つていうところを聞いたときに、こ

れってトバー君のことかなあって一瞬思ったんだけど、900年とか経ってもトバー君って枯れた感じにはちっともなっていないよね。これは、ボクとしてはほめてるつもりだけど、もしかして、かなり失礼だったりする？

① いまの詩で「いにしえの人々の心」と訳したところについて少し補足しておきたいと思います。原詩では「古意こい」の2文字です。太古の精神と訳してもよろしいでしょうか。前にも申した通り、昔の中国には正しい規範を古い時代に求めるといふ思考法が強くあり、孔子はとくに数百年前の文王の時代にそれを求めました。我が父は「古意」の探究を一生のテーマとし、歴史も音楽も同じ姿勢で向き合ったのです。これは私たちの時代の話をするときにはとても重要なことなので、繰り返し強調しておきたいと思います。

——それと関係するのかわかないのかわかんないけど、人類の進化の道を振り返って、狩猟採集民だった時代から人間の本性はそれほど違っていなかったりするんで、そのころの暮らし方と比較して現代社会のあれこれを論評するっていうのがよくあったりするよね。チンパンジーとかゴリラとかと比較するってこともある。そういうのがなんかしら説得力があるように見えたりするのは、昔の中国人の思考法とどっか共通するところがあったりするのかなあ。

㊦ たぶん、人間の脳がどういふことだと納得しやすいのかっていうことに起因しているのではないでしょう。生物は、過去の経験に照らし合わせて、次の行動を選択すると生き延びる確率が高まります。そのようなことが高度な次元ででき

るように人間の脳は進化してきたのでしょう。だから、昔にさかのぼってこうだったと言われると、ああ成程ということになりやすいのでしょう。

——脳の仕組みに由来するってことかあ。このごろはテレビでも、日本はずばらしいみたいな番組が結構あって、そんなのを見て、伝統を守ることがやっぱいいんだみたいについて感じてしまうのは、要するに脳のせいなのかもね。うっかり脳にだまされてるってことかなあ。うるわしい伝統みたいに言われているのが、実は明治になってから作られたものだったりすることが多かったですよね。意外と底が浅かったりするんだよ。皇室を巡る議論だってそうだもの。伝統を言うのなら、トバー君並みに少なくとも千年単位で言ってもらいたいよね。いまの周の文王とかの時代になったら、日本なんかは弥生時代だか縄文時代だか、とにかく



く天皇なんかはいなくなっちゃうんだけどなあ。

㊦ 古ければ古いほどいいというのだったら、それこそチンパンジーとかゴリラとかのところにさかのぼってしまいかねません。

——どうせだったら、恐竜の時代くらいにまでもどって伝統を言っしてほしいよな。そんなのバカバカしいって言うだろうけど、うるわしい伝統を持ち出すのは、要するに脳が納得しやすい仕組みを利用して、自分にとって都合のいいものを、押し付けるための論法なんだよなあ。バカバカしさでは恐竜を持ち出すのと少しも変わらないんだよ。

㊦

古いものを巡る議論はとりあえずこれくらいにして、そろそろ前回の続きに  
しまししょうか。

いりよう

おうようしゅう

夷陵県で歐陽脩の至喜堂を訪ねたところまでお話しました。流れが緩やかにな

ちよんじょう

かゆう

った長江をゆったり下って、嘉祐4（1059）年の年の瀬に私たちは荊州に到着

けい

しました。ここで船から完全に降りて正月の五日まで過ごし、そこから先は陸路  
を取ることにしました。

——今度は陸路か。陸路ってことになると、馬ってこと？ 船なら荷物を運びや

すいだろうけど、さっきの琴のようなものは馬車とかに載せて曳いて行ったの？  
生まれて間もない子どもも連れていたんだよね、それも馬だったりすると大変じ  
やないの？

㊦ 特にかさばる大きなものは船で都に送っていくらか身を軽くして、宿場ごと

に馬を借りて旅を続けました。父としては、この機会にまだ見ぬ場所を訪れておきたいとの思いから、あえて陸路を選択したのでした。

子どもの世話は乳母と妻に任せっきりでした。いまなら、育児を手伝わないひどい夫だと非難轟轟（いっせい）でしょうけれど、当時はむしろ育児に手を出す方が異様でありました。女たちにとって労苦が多く、いまなら耐えられないようなことも当たり前とされていました。

——やっぱそうなんだよなあ。女性は大変だったんだよね。でもその大変さは顧みられたりしないんだよ。トバー君は旅の詩をたくさん残したけど、奥さんと

か乳母さんは毎日の苦勞を詩に詠むようなことはなかったんだよね。そういうアンバランスってなんのかなあっていつも思うよ。いまだってたくさんあるよ。支える、支えられる関係でさ、内助の功みたいなのがたたえられたりするのって、いったいいつの時代ですかって思うよ。それこそうるわしい伝統？ 男性、女性に限らず、よく見られやすいところと、陰になってしまふところっていうのがどうしてあるんだか。日本はすばらしいとか言つて、男女の格差は世界最低クラスだもんな。笑わせんなよなあ。

㊦ あなたにとってとても大切なテーマに、事のついでのようにして軽々しくコメントするのは控えたいと思います。私は当然批判されなければならぬ封建男子の1人であったのです。そのような側面はこれからもしばしば出てくるであり

ましよう。

——900年前のトバー君を批判する気はないよ。ボクが問題にしたいのは、人々を支配している時代の雰囲気みたいなものがどっからくるのかってことだよ。その空気を心地よく吸ってぬくぬく生きている人がいる一方で、息苦しくてひいひい言いながらやっと生きている人もいるんだよ。トバー君はたぶん一歩間違ったらぬくぬく生きるだけの人で終わったんだらうけど、きつとそうではなかったんだよね。

㊦ それへの返答は保留しておきましょう。

荊州滞在中にいくつかの詩を詠みました。そのなかから「荊州十首」と題した

連作の一部を聞いていただきましょうか。これはまさに向う見ずにも背伸びをした典型です。杜甫の「秦州雜詩二十首」を強く意識したものでした。年が改まった時点で25歳になったばかりの若造の私が、48歳の杜甫の向こうを張ろうとしたのは若気の至り以外の何ものでもありませんでした。

杜甫のことはまだ何もお話していなかったですね。

——尊敬する3人が孔子に杜甫に陶淵明とうえんめいだったってことだけは聞いたよ。杜甫っていうのは、たしか「国破れて山河あり」の人だね。ボクだってそれくらいは知ってるんだ。

㊦ 杜甫と李白りはくが漢詩の二大巨峰であると、たぶんどの本にも書いてあるでしょ

う。杜甫は詩聖しせいと称されて、中国史上第一の詩人であるといわれることもありま  
す。そのような評価が定まったのはちょうど私が生きていた時代で、とりわけ  
王安石おうあんせきと、私の弟子に当たる黄庭堅こうていけんが杜甫の顕彰に務めたことが大きく影響しま  
した。

杜甫は私より300年余り先輩の唐てうの時代の人です。そのころの未成熟であつ  
た科擧を受けて落第し、何としてでも官僚になりたいと、伝手つてを求めては高い位  
の人たちに詩を献じ、なりふり構わずといいますが、涙ぐましいまでに自分を売  
り込む努力をして、ようやく小さな官職を獲得しました。そのころは実力よりも、  
上にいる人たちにどれだけ気に入られるかが重要だったのです。杜甫が宋の時代  
に生まれていればきつと楽々合格していただでしょうし、逆に私が唐の時代に生ま  
れていたなら、皮肉っぽいことを口走る性癖が災いして官僚にはなれなかったでし

よう。

杜甫が官僚になってすぐのときに安祿山あんろくざんの反乱が勃発しました。玄宗皇帝げんそうは首都長安ちやうあんから逃げ、杜甫は取り残されて、都を占拠した反乱軍の監視下に置かれました。苦難の末に長安から脱出して、玄宗皇帝から皇位を譲り受けた息子の新皇帝のもとに駆けつけ、その功をもって皇帝の近くに仕える職を授けられました。新皇帝は長安を取り戻し、杜甫は新皇帝とともに都に帰還しました。祝勝気分でいられたのはわずかの間で、杜甫は朝廷の雰囲気ふんぎに馴染めず、周囲から浮いた存在となり、ついには職を投げ捨てて放浪の旅に出るということになりました。杜甫が授かった職務は、皇帝に落ち度があったときに指摘するということなので、建て前はそうであっても実態は異なるのが暗黙の了解でありました。杜甫は生真面目に職務を果たそうとして、周囲から冷たく見られ、皇帝にも嫌われてしまったの



です。

朝廷を飛び出した杜甫には将来の見通しがまるでなく、家族を連れて、その日に食べるもの、その日に泊まるところにも困りながら、知り合いを訪ねつつ西へ西へと移動し、たどり着いたのが国のはずれに近い秦州しんの町でした。そこで詠んだのが「秦州雜詩二十首」の連作で、その最初はこのような感じですよ。

見るものすべてが、

人の世の思い通りにならぬのを悲しませる。

人を頼みとして遠くここへと旅をしてきた。

延々と六十里にもわたる長い長い坂におびえ、

峠にまでたどり着けるのかと悲しくなったこともあった。

夜になって水のない涸れた川を渡ったことも、

人氣ひとけのない山でもう秋になった感じ入ったこともあった。

西へ西へときた末に、

戦のありさまを耳にし、

ついに我が心はくじけ、

ここに留まることになった。

——なんか重い感じかも。そのときの事情はいま聞かせたもらったことしかわからないけど、つらい境遇にあったんだろ？なあってことは伝わってくるよ。

① 重い雰囲気だけでも受け止めていただけたらそれで十分です。いまお話しな

がら、漢詩をわかりやすい日本語に直す難しさを改めて感じました。

自分の詩であれば、わかりやすさを優先して本質をいささかはずしてしまいううなことがあっても、自分の拙さが原因なのだから仕方がないとあきらめるだけです。しかし、尊敬する杜甫の詩で安易にあきらめるのは許されません。しかし、いま訳す過程で、詩の本質に関わるおよそ8割は捨てざるを得ませんでした。残った2割が重い雰囲気です。それだけははずせないと思いました。

百人一首に、たとえば、

滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなお聞こえけれ

というのがあります。この歌の「滝は涸れてその音はもはや聞こえなくなつて久

しいけれど、その名はいまもよく知られている」という意味を取って平易な英語に直して、それでおもしろい詩になるでしょうか。日本語で発音すれば、「た」の音、「な」の音が軽やかに響いてなんとも心地よく、だからこそ長く愛されてきたのでしょうか。詩歌はかなりの部分を音に負っているのは間違いありません。百人一首を英語に訳さなければならぬとしたら、この歌は選ばないのが賢明なのではないでしょうか。

漢詩のきわめて重要な要素として対句ついでくがあります。いまの杜甫の詩を例にして対句を一カ所、文字で書いてみると……ちよつとペンを貸してもらって……

水落魚竜夜

山空鳥鼠秋

というのがあります。右の行と左の行とで一文字ずつがペアになっています。対句は、漢字一字が一語で一音という中国語の特性を最大限に活かしたもので、目でも見ても、耳で聞いても、口に出しても、意味的にも、ペアの相乗効果によって詩の世界が大きく広がります。ここで「魚竜」と「鳥鼠」ちようそは実在の地名であると同時に、旅の困難をイメージさせるものとしても用いられています。日本語でこの対句のもつ効果を生み出すことは私の技量では不可能で、「魚竜」「鳥鼠」という語さえも省いてしまいました。

それと、よくわからないのですが、対応関係が極めて密にからまった対句のような表現を日本語で用いると、うるさく感じられて、むしろ逆効果ということもあるのではないのでしょうか。どうですか？

——さて、それはどうなんだろう。対句的表現のいい例だってあるかもしれないけど、いますぐには思いつかないなあ。

㊦ では、私の十首連作です。それはこのように始まります。

旅人が三峽さんさきょうを出ると、

そこから先はどこまでも平らだ。

蜀しよくの川は山地を切断していたが、

楚その川は平野を切断する。

蜀から下って来た船は、

呉こから上って来た船に囲まれる。

蜀の山の人間は平地の商売人にまどわされ、

砂を巻き上げる平地のつむじ風にもまどわされる。

荊州の町を囲む堂々とした城壁を見れば、

蜀と楚の間には長い興亡の歴史があったことを、

思わないわけにはいかない。

いまは意識して対句をほぼそのまま日本語に移してみました。いかがでしたか。

——そうね、なんかべたあつとした感じかもね。

㊦ 三峡をはさんで、ちやうじやう長江の上流は蜀、中流が楚、さらに下流が呉です。荊州は

山地と平地の境目に位置することから、軍事的に重要な場所とされ、たとえば三  
国志の時代に蜀と呉と魏魏の三つの国が天下を争ったときにも、このあたりは争奪  
の対象となりました。蜀と楚の風土の違いを対句表現で強調したのが、うるさい  
感じになったのかもしれませんが。

——えーと、旅先で異なる風土に触れたことで、郷土意識を呼び覚まされたって  
ことがこの詩の主題？ 蜀の人は純朴だったことを前に言ってたから、広い土地  
を渡り歩く商売人にはなんかかなわなない感じがしたりした？ 見るものすべてが  
悲しませるという杜甫の詩に比べると、かなり軽い感じかもね。



㊦ おっしゃる通りです。私は杜甫の半分の年齢で、「前途洋洋たる未来」が開け、境遇が違いすぎました。深みのある詩が詠めなくて当たり前です。

それだけではなく、本源的な個性の違いもあったと思います。私が同じ48歳になったときは1回目の流罪のさなかで、そういう時期であれば杜甫のような重々しさが具わってもいいはずなのに、そうはなりませんでした。实例を一つ出しておきましょうか。

——またまた脇道にそれちゃうけど、どうぞやってください。いいかげんに酔っ払って、おんなじ話ばかりかする無限ループにはまるより、あっちこっちに飛ぶ方がいいかもね。

Ⓣ では、酒にまつわる詩を選びましょう。

あるとき大酒を食らい、無限ループにはまったか、何をしたのか、記憶は定かでないのですが、何かしら体裁の悪いことをしてしまって、そのことを耳にした友人が、酒はほどほどになさいと戒めの詩を書いて送ってくださいました。それに対する返事の詩です。

その前に、少しだけ事情を言っておきますと、一緒に飲んだ相手は王兄弟おうでした。犍けん為いという町に立派な書楼を所有していたあの王兄弟です。あれから王兄弟は零落し、私が流された町とは長江をはさんで向かいの地でひっそりと暮らしていました。王兄弟も私もお金がなく、例の「飲湿いんじつの法」を用いてまずい安酒をやたらとあおり、日頃の鬱積うっせきというのもあったために、失態を演じてしまったのです。

「酒で真によろしいのは何であろうか」。

そのように問われた昔の賢人は、

私とは大違いで、

呑めば呑むほどきちっと威儀を正し、

決して乱れることがなかった。

「かようにお尋ねになるのは、

あなたさまがまだ酒中の趣きを得ていないからでありますよ」。

賢人はそのように答えた。

なかなか気の利いた返答のようではあるけれど、

要はお茶を濁したまで、

賢人は実は酒の道をしらなかつたのだらう。

酔っているときには、万の思慮が一掃されて心はからっぽになり、

醒めると、よきによきと草が芽生えるように億の思慮が湧き出てくる。

それによって十年來のことがすっかり洗われ、

何が真まことであり何が妄もうであるかがはっきりわかるようになる。

このたびは自分から痛飲したのではなく、

人と逆さからうことができないう性分のために、

友人が苦悩すれば自分も苦悩し、

ともに酒の道へと歩み入らねばならなかつたのだ。

言ってみれば、私は酒を貯える瓶のようなもので、

満ちれば人に与えてともに呑み、

からっぽになればごろんとひっくりかえるというわけだ。

詩はまだ続きますが、この先は酒の主題と離れるのでここまでとしておきましょう。

—あのですね、まさかとは思いますが、もしかして、トバー君って、ここでボクの苦悩に付き合ってくれてるの？

㊦ ほっほう、あなたは苦悩しているのですか。

—そりや、そうだよ。苦悩も苦悩、くのうさん久能山東照宮には日本平ロープウェイで行

きましようっていうくらいに、いつつも宙ぶらりの思い悩みでいるんだよなあ。

いま酒の道の真髓を教わったんで、ぐいっと呑んじゃおうかなあ。お酒で思慮が一掃されて、真か妄かが弁別されるっていうのはいいね。二日酔いに苦しみなから、酒の席で乱れたことをぐちぐち反省するのが酒の真骨頂であると、ヘンに自虐的なことを言うヤツもいるけどね。

㊦ では、荊州での二番目の詩です。

荊州から南を見やれば、

古戦場が多々あり、

英雄の猛き思いや、

忠臣の清き思いが、

いまも感じ取れるかのようだ。

古く繁栄した町は消え去り、

井戸を囲んだだけの小さな村が残り、

そこには昔ながらの姓を保つ人々が住んでいる。

古今に変わらぬ大地のありさまは目には明らかでも、

歴史の上がり下がり、

軽々しく論じるわけにはいかないのだろう。

地政学とか地勢論とか、地理的な条件が国家の命運を左右するという考え方があります。荊州の置かれた地理的な条件は昔も今も変わらず、目の前にある地勢

から過去の興亡を議論しようとする誘惑について負けそうになります。一時期は繁栄した大きな町が滅び、小さな村がかえって昔のままに残るのを見れば、そもそも何をもって命運を測る尺度としたらいいのでしょうか。さらに言えば、国のかの地勢を云々するような時代ではもはやありませんでした。旅の始まりの郭かくりんの詩にあつたように、宋の国の興亡は外の国との関係に強く影響されます。視野をずっと広げなければなりません。蜀人としての意識が強くありながらも、そのようなことを思ったというわけです。

——日本でも、戦国時代だったら、県のレベルくらいの地勢が決定的に重要だったんだろうね。いまは地球規模での地勢が重要で、これから先は宇宙規模での地勢が決定的な要因になるのかもね。大宇宙において、たぶん人類は稀有な存在な



んだよなあ。人類の存続がかかっているんだという認識がなければならぬのに、温暖化対策をさぼってチマチマした領土問題にうつつをぬかしてみたり、核のゴミを垂れ流しにしてなおかつ核兵器を虎の子の財産のように持つてみたがったり、アホだよな。国境に我が名を付けた壁を築くとかほざいたどっかの国の大統領候補がいるけどさ、それってトバー君とこの秦しんの始皇帝しこうてい並みの古いセンスの地政学だよな。えーと、万里の長城って、始皇帝が築いたのが最初だったよね。

㊦ 始皇帝をご存知でしたか。世界遺産に登録されたりしているのは、始皇帝よりもずっと新しい時代のもですが。

——始皇帝っていうのは、ほら、兵馬へいば俑ようで有名だから、テレビかなんか見たんだ。

あのさあ、始皇帝っていうのは、自分の王朝が永遠に続いて、自分の後に二世皇帝、三世皇帝、四世皇帝……って順々になっていけばいちいち名前を考えないですむって思っていたんだよね。それでいったら、いまごろは三百世皇帝くらいになっていたのかも。

それでつい思い出すと、またまたジョン・クレアの詩なんだけど、こんなものがあるんだ。10年前に読んだときには中国には100パー関心がなかったから素通りしちゃったけど、最近読み返して、思わず笑っちゃったんだ。

あそこでは、小さなミヤコグサの群れが

赤味がかった黄金色の花を永遠に咲かせていた。

そして中国の王様たちのようにつきつきと現れるが、

けっして滅びるようには思われなかった。

(鈴木蓮二訳 166ページ)

ねえ、なんかおかしくない？ 雑草があとからあとから生えてくるのを見て中国の王様を連想してるんだよ。それこそ始皇帝の思惑通りになっていたら、まさにぴったりの比喩だったね。

㊦ 遠くイギリスから見たら、中国の皇帝の入れ替わりなどは雑草の生え替わりと同じようなものなのでしょう。宇宙規模で見たらいまの人類の愚かしさは明々白々で、国家の興亡など論じるのもむなしくなる一方で、雑草の露を吸って生きる虫がいるように、小さな村の人々のささやかな暮らしこそが尊いものであると、

そこに目を向ける視線も大切なのではないでしょうか。

——ジョン・クレアは雑草や虫の方にこそ価値を見出そうとしたんだから、中国の王様と雑草を並べたのは、むしろ王様にとって名誉だったことになったりするのかもね。

㊦ 第三首目は、私の了見の狭さが思わず露呈してしまった詩で、恥ずかしくありますが、聞いていただきましょう。

楚の地は限りなく広く、

遠くぼんやりとどこまでも田畑が連なる。

そこに汗水垂らして働く人の姿を見ないのは、

植えたら植えっぱなしということなのだろうか。

己の怠け癖を何とかしようという様子がまるでないのは、

愚かというべきか、哀れというべきか。

これで凶作に見舞われたら、

年のめぐりが悪かったと、恨んですませるつもりなのだろうか。

蜀は山がちで耕作に向く平地が少なく、狭い田畑に労力を傾注する、いわゆる集約型の農業です。楚にはせっかく平らかな土地がたくさんあるのに、耕されてもいないところが目に付き、働いている人が少なく、楚の人々は怠慢であると感じたのでした。

官僚となってこれから天下のために働こうというのに、蜀がどうだ、楚がどうだという了見でいいはずがありません。それなりに、私は蜀人としての意識をかえって強めていたのです。

前回、欧陽脩の文章に、蜀はかつて国の中央と通じないこと59年に及んだとありました。中国の歴史には大きく見て、統一の時代と分裂の時代が交互にありました。宋は統一の時代で私はその安定期を生きました。宋の前の統一の時代は唐王朝でしたが、安祿山の反乱を境として分裂の時代に入り、唐王朝が滅ぶと、蜀も含めて10くらいこの国が分立するようになりました。それを五代十国時代ごだいじゅうこくといいます。日本の戦国時代に似て、各国は互いに争い、国力の増強に努め、地方ごとの個性が強められたのです。

五代十国時代に、荊州には高こ氏の建てた国がありました。分裂の時代において

もとくに小さな国で、戦略的に重要な誰もほしがる荊州を保持するのに、高氏は大変な苦勞をしました。いくら城壁を高くしても安心できるものではなく、高氏が採ったのは徹底した弱腰外交でした。周囲の全ての勢力にひたすら媚び諂うことで自国の安泰を図ろうとしたのです。

荊州の町を囲む高い城壁の東の隅に、

ぼうさろろ  
望沙楼ぼうさろろの高い朱塗りの欄干がある。

かつて高王はここに隣国の使者を招き、

盛大な宴を催して接待し、

楼から見渡す大地をもって、その隣国に奉仕することを誓った。

いくつもの国に対して高王は同様の約束をしつつ、

いまにもどこかで烽火のろしが上がるのではないかと、

びくつきながら欄干から眺めていた。

いまは霞む彼方に屋根の先がぼんやり見えるだけであるのだが、野にはなお戦に倒れた人々の骨がそのままに埋れているだろう。

百年にわたって競い合った豪傑は誰もいなくなり、

いまとなっては魚と蝦が争ったようなことになったのだ。

——ホント、争いなんて、後から見たら、どうでもいいことなんだよなあ。弱腰外交で戦争いが避けられたのなら、とつても賢い王様だったとボクは思うよ。それとまったく逆なのが、どっかの国の小太りの若い指導者だよ。ここどころミサイルを撃つたり、核実験をしたり、ことさらに居丈高に振る舞っているけど、



牛に向かって体を膨らませてみせたイソップのカエルそっくりで、なんか滑稽だよね。笑っちゃいけないんだけどさ。

そういえば、話が急に小さくなるけど、職場なんかでも、やたらと攻撃的になっちゃう人ってよくいるよね。たぶん、まわりから浮いちゃってるって感じてるもんだから、ことさら自分の存在をアピールしようとしているのかもしれないけど、文句ばっか言ってるさ、まるつきり逆効果で、自分にとって最悪のことをしてるってことがわかってないんだよなあ。そういうボクだって、カエルを笑っているながら、自分のことはなんもわかっていないんだけどね。

㊦ 続く二首は省いて、その次は荊州での年越しを詠んだ詩です。

年末の荊州は風雪の日が多く、

そうでなくても旅人の心は落ち着かない。

町の人や村の人が嬉々としているのは、

昔から季節行事を重んじる土地柄で、

鬼やらいの日を待っているのだ。

いよいよその日になると、

竹を爆発させる音に、

子どもたちがわんさと集まってくる。

その賑わいのなかで、

私はしみじみと故郷の友人を想うのである。

——よその土地にきてにぎやかなお祭りとか見ると、なんかふと寂しくなるってことがあるよね。

㊦ 年末にはとくにそのようになりやすいのでしょうか。私が官僚となった最初の赴任地で、やはり年末にホームシックのようになったことがありました。次回くらいにそのときの詩を聞いていただくことになろうかと思えます。

——えっ、ホームシック？ トーバー君って、そんなに繊細だったの？

㊦ 次の二首も省いて、連作の最後の十首目は、荊州で新しい年を迎えての詩です。

荊州城の南門から始まる大道を馬で走り、

春の陽射しが注ぐ野に至ると、

秋の枯れ草を焼いた跡から、

風に誘われて緑が芽生えようとしている。

荊州から道は縦にも横にも北にも南にも通じ、

天下を自在に往来できるといふのに、

かつてのここの王様はどうしてああまで弱々しかったのだろうか。

もう一度弱腰外交の批判です。若いころは、偉ぶって歴史上の人物を批評したがるものなのでしょう。春の陽光のもとで馬を駆った勢いでこんなふうには詠んだ

のです。経験を積むうちに威勢のいい言葉を安直に吐くようなことは減ったのですけど。

——年齢とともに考え方が変わるの当たり前前だよ。それが成長だか劣化だかはわかんないけど。

㊦ 年が嘉祐<sup>かゆう</sup>5（1060）年に改まり、私たちは旅を再開して荊州を出発しました。船であればとりあえずどこかに繋げば宿泊できますが、馬の旅ではそうはいかなくて、日のあるうちに次の町に必ず着けるよう、朝はできる限り早くに出発するということになりました。夜の明けないうちから馬上で揺られて、このような詩を詠みました。

どこまでも高く涯のない天空は、

夜の厳かな雰囲気を満たされている。

無数の星が正しくその位置におさまり、

大きな星は射るような光を放ち、

小さな星は闇から湧き出てくるかのようにだ。

星とはそもそも何ものなのか。

天界と人界とは干涉し合うものなのか。

世の人々は、星に一つひとつ名を付け、

あれは箕の形、あれは柄杓の形と、

無理に見立てようとす。

箕も柄杓も人の道具で、

天にとっては無用であるのだから、

星は自分からそのように名乗りはしない。

遠くから何かに似ていると想像するのではなくて、

近くに迫って星を見たらどういうことになるのだろうか。

考えてもまるで掴みどころがなく、

溜め息をつくしかない。

——へーえ、星の正体を知りたいって、トーバー君って、理系だったりするのかもね。仙人の薬を作るのが化学実験みたいで面白かったって言ってたしね。生まれる時代が違っていたら、レオナルド・ダ・ビンチとかガリレオとか、科学の研

究もするような感じの人になっていたかもね。

天界と人界が干渉し合うのか疑ってたけど、星占いみたいなものは中国でも昔からあったんだよね。

㊦ 遙か遠くにある星が、ご苦労にもふつうの人の運命にいちいちちよつかいを

出すというようなことはあまり考えられていませんでした。木の葉の裏に描かれ

た篆符てんぷの話をしました。天下の趨勢を左右するような大きな異変があるときには、

天意が事前に何らかの形で示されるといふことは考えられていて、星の運行の観

測が国家の仕事として行われていました。西洋においては、いま名を挙げたガリ

レオによって、天界の事象と人界の事象は関係しないとはっきりと示しましたが、

私たちの時代にはまだそこまでにはなっていないませんでした。天界と人界の関係は



古くからいろいろな説があり、後に王安石が主役となって大論争となったのですが、それはまた別の機会にお話するかもしれません。

——例によって、後でのお楽しみみてことだね。

㊦ 早朝の空気はふだんと何か違う思索を誘ったりするのでしょうか、次のような詩もあります。

富貴なるものがもとから定まっているのではないとしたら、

栄えたり衰えたりするのはその人自身によるということになるうか。

だとすると、功名心が身の内でやかましく騒ぐのが当然で、

私に限ってそのようなことはないなどとは言っていない。

それでちんまり縮こまっていられなくて、

こうしてそろりそろりと旅に出てきた。

それでも西に故郷を想うことがある。

我が田園が荒れるのは覚悟の上だ。

外に出てきて何をするのかというと、

あくせく富を稼ぐ気はない。

天下に何かしら足りないものを補うのだ。

それができなければ、怠け者で愚か者だったということになる。

人生は意気を重んじる。

出処進退にためらいがあってはならない。

春を迎えたいま、

故郷の水辺では蓮が葉を広げ始めているだろう。

湖をおおいつくすまでに蓮を育てあげてきた先人の営みに、

何かしらかなうようなことが私にできるのだろうか。

——いまの詩の最初のところは、トバー君って、やっぱ理系っぽいよねえって感じた。理詰めに順々に進んで、これで詩なのかなあって思わせたんだけど、さすがにそれだけではなかったね。「人生は意気を重んじる」と勢いよく言ってるそばから、蓮を育てるのにはかなわないみたいなのを言って、単純な一直線じゃなくなったもんね。

ⓧ 私には世俗的な欲はあまりなかったとお話しました。高い地位に昇って権勢をふるってやろうとか、ひと財産を築いてやろうとか、そういう思いはまったくありませんでした。格好をつけて言うのではなくて、そういう欲心がすつぽ抜けていたでしょう。意欲としてあったのは、天下に足りないものを補いたいということ、それは見えにくいものを見せるようにする、あるいは為政者の力の及ばないところを少しでも減らすということになるでしょうか。

都に出て官僚になるとは、根無し草になることを意味します。代々蓮を育て、その地の風景を変えてしまうような、まさしく地に足の着いた人生を歩むことはできません。逆に言うと、官僚が根を生やすということは不正の温床になりやすく、国家としてはそれを嫌い、故郷の町の長官になるといったことはありえないことになっていました。旅に出て蜀人としての意識を改めて強めてしまった私は、

根無し草になる覚悟がまだできていなかったのです。

旅は荊州からほぼ真北へと進んで襄陽じょうように着きました。襄陽は理系的発想でい

と、中国の重心に当たるでしょうか。中国の北側と南側を右と左に載せた天秤の

支点が襄陽で、私から200年ほど後に、北から蒙古もうこが攻めてきたときに襄陽に

おいて壮絶な攻防戦が繰り広げられ、ついに突破されたとたんに宋の命運は尽き

てしまいました。三国志の時代にもここで大きな戦があり、劉備りゅうびが有名な「三顧

の礼」しよかつこうめいで諸葛孔明を迎えたのが襄陽郊外の地でした。

そのような襄陽に入るに当たっての詩。

竿を捨ててからのこのひと月ほどの旅は、

ずっと砂ぼこりに悩まされ通しだった。

襄陽の手前で滔々と流れる大河に出合い、

その清らかさにさっぱりと身を洗われた気分になり、

この心持ちは故郷の蜀江しゅうかうのほとりに立つのに似ると感じた。

それもそのはずで、聞けばこの川は、

蜀の地から我らの旅とは反対まわりで流れ出てきた漢水かんすいなのだ。

蜀江はなかに鯨も棲もうかというくらいに水量が豊かで、

漢水もまた広々として、軽々しく渡ってみるようなことはできない。

遙か二千年の昔に、このあたりにも周の文王ぶんおうの教化が及び、

遊女も礼儀正しさをわきまえるようになったと聞いている。

漢水の水の音はそれから変わりはしないのだろうけれど、

世の変転とともに、いにしえのよき風はすたれ、

川風が寒々しさを帯びて吹き過ぎて行く。

私は文王の時代を偲び、

蜀から流れてきた川に向かって、

我が身なりをきちんと整えるのだった。

——また周の文王か。「古意」を想うのと、故郷を想うのと、二つの気持ちちが合わさったってという詩かな。こんなふうに言えちやうのって、メチャクチャ中国に詳しくなったみたいで、ボクってすごいよね。

㊦ ここで、蜀江には鯨も棲むと詠んだのは、

「おらんくの池にや、潮ふく魚が泳ぎよる、

と似て、かなり強烈な故郷自慢です。

——あのですね、いきなり大きな声で歌わないですよ。みんながこっち見て、恥ずかしいよ。音痴だって言ってたくせに、なんで歌うの？ えーと、いまの歌は聞いたことあるかも。うちの施設の利用者さんのだれかの得意歌だ。

① 「悪事千里を行く」と言いますが、周の前の時代の墮落した文化はあつとい

う間に中国全土に広まって風俗が乱れ、それを文王が正そうとしてもなかなか広がらずに、周の都の洛陽らくやうから200キロ先の襄陽に達したことが特筆すべき事柄



として、「遊女も礼儀正しさをわきまえるようになった」と記録されたのでした。

襄陽の町の南に峴山けんざんという山があります。これは昔から非常に有名な山で、私たちがせっかく襄陽にきたのだからと登りました。さほど高い山ではなく、高尾山の弟分ないしは湘南平の兄貴分といったところでしょうか。そんな山が天下に知れわたったのは、諸葛孔明より40年ほど後輩になる羊祜ようこという人によりまして、羊祜は自ら志願して襄陽にやっできて、天下統一の基礎固めとなる重要な仕事をしました。

羊祜は峴山に登ってこのようなことを言いました。

宇宙はいつからあるのだろうか。宇宙の最初からこの山はあったのだろうか。我々が知り得ない遠い遠い昔から、数え切れない人々がここに登り、この景色を見

ただろう。我らの前に無限の時間があり、無数の人がいた。我らの後ろにも無限の時間があり、無数の人がいる。いまここで、その誰を見るのか。前の人を見なければ、後ろの人も見ない。これを悲しまずにいられようか。

この言葉を刻んだ碑が峴山の山頂に建てられ、読む者は涙を落とさずにはいられないということだ。「だるいひ墮涙碑」と名付けられました。

——今日は宇宙規模の話が続くね。いまの詩は、理系っぽく言うと、時間軸は前にも後ろにも無限に長く延びているけれど、自分はその上の一点にしか身を置けないって悲しみだよね。現代の科学では、宇宙はビッグバンから始まったって言うてるから、時間軸の目盛りは138億年くらいしかさかのぼれないんだけどね。

逆に宇宙に終わりがあのかどうかはいろいろな説があるみたい。

それで思い出したのが、またまたジョン・クレアなんだけど、「ソング——最後の日」っていう、よくわからない詩があるんだ。その最後のところだけを言っとね、

星は空はすべて衰退し、

この世はもはや存在しなくなり、

天そのものも消滅するとき、

そのとき、あなたはわたしのことを思い出すであろう。

(鈴木蓮二訳 180ページ)

「あなた」ってだれなんだろうね。たぶん神様かな。天が消滅するときに自分のことを思い出してくれるっていうのはどういうことなんだろうね。よくわからないなりに、羊祜の発想とはまるで違っていてちよっとおもしろいと思わない？ たぶん、ジョン・クレアは、自分が生きているいまの時代には自分のことを認めてくれる人はいないけれど、宇宙の終わりには「あなた」が認めてくれるって、そう思いたかったんだろうね。強烈な孤独感？ それとも疎外感かな。

Ⓣ 逆に羊祜は生きているときはひとかどの人物として世間から見られているのだけれど、しかし、長い時間のなかに身を置けば、「前の人を見なければ、後ろの人も見ない」という1人になってしまっのをむなしく感じたともできるでしょうか。

それでは、峴山での私の詩です。

遠く南からきた我らの前に、

ぼんやりと春の塵に包まれる山があった。

登ってみると、山頂の幅は百歩にも満たないけれど、

眼下には広々とした大地をひと呑みにする。

たちまちもの悲しさに襲われるのは、

千年変わらぬ感慨がここにあるからなのだろうか。

私のこの憂いを後に誰が知るのか。

私はいまを生きているのに、

未来を想ってここに苦しんでいる。

山の上には堂々とした不変の檜の巨木があり、

年々緑を取り換える柳を見下ろしている。

大才と小才はもとから異なっているのか。

永久性と一体化できるものなのだろうか。

旅人が山の上にいる時間などは、

星の光が魚籠びくの底に達する一瞬のきらめきにも及ばない。

現時点では、賢と愚はまだ分かれていないようであっても、

後からくる人にはすでに明明白白となっているのである。

未来へと思いを馳せると苦しみばかりが生じる。

——これもジョン・クレアとは逆向きなのかもね。ジョン・クレアは遠い遠い未

来に希望を託したんだ。どっちにしても、遠く自在に馳せ飛ぶことのできる思索と異なり、自分の身は時間軸の一点にしか身を置けないのって、あたりまえのことなんだけど、なんか悲しいよね。

㊦ 襄陽から西に20里の山中に諸葛孔明の旧宅がありました。

「諸葛孔明が西の蜀にきて以来、

蜀人の愛は千年変わることがない。

今朝、諸葛孔明の故郷にきて、

蜀を故郷とする私は悲しみに耐えられない。

この山がちの何の変哲もない土地から、

天子の軍団を指揮する人が出ようとは、

当時の人々は思いもしなかっただろう。

世に出る前の諸葛孔明を臥竜と呼んだ人がいた。がりのう

竜がわだかまっていたときには、

ここの山水も秀でて見えたのだろうか。

竜がここから去ってしまうと、

棲んでいた淵も消えてしまったのだろうか。

せめて竜が尻尾を引き摺った跡だけでも見たいとの願いは、

むなしく叶わず、はらりと涙を落した。

——トバー君はこの前の詩では批判してたけど、やっぱ尊敬していたんだね。



偉大な先人の故郷を訪ねてみたいってよくあることだけど、そこに行ったからといって特に何かがあるわけではないんだよなあ。ボクもジョン・クレアの生地を訪ねたけど……でも、その話は、また後でつてことにしようつと。

㊦ それは私の真似ですか。

次は、襄陽から道を東に転じ、しやう葉県そうふかんにある双鳥観おうきやうという道教の寺院を訪ねたときの詩です。寺には漢の時代に県知事であったとされる王喬おうきやうが祀られています。

王喬は仙人だったという。

たまには人の世でもものぞいてみようと思いい立ったのか、  
することにかき役人になって、

毎月きちん都に上って皇帝への行政報告までこなした。

皇帝は、王喬が馬に乗ってくる様子がないのを不審に思い、

王喬の現れる日に、ものかげからこっそり観察した。

すると、南方から二羽のけり鳧が宮殿に向かって空を飛んできたかと思うと、

すぐに王喬が宮殿に姿を見せたのだった。

そこで、網を用意させ、

次に鳧が飛んできたときに、ぱっと広げさせた。

網には二つの靴がひっかかり、

それから王喬はぱったり姿を見せなくなった。

本当に仙人であるのなら、

そんなどじを踏むはずがない。

人々にあつと言わせるための洒落だったのか。

そもそも、仙人がこの世にのこのこ出てきて、

役人になるというのがおかしい話だ。

われわれは現実の世の縛りのなかでしか生きられない。

こんなふうにおちよくられたのではたまったものでない。

つまり、王喬の話はそもそもひどいいかさまで、

笑って聞き流せばいいだけなのだ。

——やっぱトバー君は仙人を信じていないんだね。でも、そんないたずら心のある仙人がいてもいいのかもって思ったりするけど。町の役人としていい仕事をしたとか、皇帝が日頃のふるまいを反省したとか、そんなことがあつたらいいと

思うな。

㊦ 町の役人としていい仕事とはどのようなことなのでしょう。旅も終わりに近づき、私自身が町の役人となるのが現実として迫ってきました。官僚になる心構えをしつかりさせなければなるまいと、いささか考えたのでした。

まず唐州で。

さらさらと水路を流れる水が、

やがて四方に分かれて広い沃野を満たす。

かつて民衆は、このような水路が、

まさかできるとは思っていなかった。

町の長官が大河の堤防を修復して新たな水路をつくると、

水はあたかも自ら赴くかのように、

水路の左右の田へと注がれ、

雲のように稲穂が広がる風景が生まれ、

この地の人々は初めて米の味を満喫できるようになった。

貧苦にあえいでいた周辺の民衆は、

水路が完成したと聞くと、

家族を連れて我先に開拓地へと向かった。

長官は言った。

「見よ、ここに広大な土地がある。

好きな場所をおのおの選び取るがいい。

自分で耕し、得たものは自分で食べていい。

いずれ土地は諸君らのものになる。

もといいた村に帰ってこのことを吹聴し、

大勢の人々をここに連れくるがいい」。

皇帝は、その長官を都に呼びもどすことなく、

七年の間、この地での仕事に専念させた。

以来、民衆はここで十分な食を得て、

立派な家をここに築き、

ここで死んで代々の子孫によって祀られるようになった。

天命に適うこの善政によって、

民衆は永く安らかに暮らしていられるのである。

やや過剰な称賛と感じられるかもしれませんが。優れた治水によって広大な耕作地が生まれ、多数の民衆が生業を得たのは事実でありました。

次に許州せよで。

春の雨が軽やかに降り注がれてから晴れ上がると、

許州の西湖はことのほか美しさに映える。

さざ波を立ててここに流れこんでくる水は、

古い城郭の角で、

昨夜、その響きを耳にしていたものだ。

かつてこの地の長官は春の遊びの場を作ろうと、

千人の男の腕を使って沼地をさらった。

民衆が土を掘り出して担いで運ぶありさまは、

蟻の大群がうごめくかのようにであったという。

いま桃の花が咲こうかという時分になっても、

寒さが残るのが恨めしく思われるのだが、

いくつかの梅の花が落ちずに品のいい姿を保っている。

いずれ春の野遊びをする人々がここに集まり、

酔って杯を持ったまま道に伏せ、

助け起こしてもまた倒れるというようなことになるのだろう。

湖のほとりに建つ楼閣は立派で美しく、

ここをうがった長官は、



そこで民衆とともに春の風光を愛でたという。

町のお歴々は長官とともに喜んだであろうが、

労働に駆り出された農民の痛みは知らずにいたのだろうか。

このあたりは七年もの間、十分な稔りがなく、

村は長く寂しげであったという。

遠く旅してきた私は、

湖の岸に立ってしばし思いにふけるのだった。

——二つの詩のどちらにも7年という数字があったけど、2人の長官はえらい違いだね。

それで思うんだけど、リオのオリンピックが終わって次は東京だね。レガシ

ーとか言ってるけどさ、東京オリンピックピックの後に残るものは、どっちなんだろう？  
開拓地を潤す用水路なのか、ヒマ人を喜ばせる湖なのか？ 美しい風景を整える  
のも悪いことではないよ。人々の暮らしがちゃんとなっていればね。長官が自分  
の行楽を優先したらだめに決まってるよなあ。

㊦ 一二つ目の詩の原文をちよつとだけ見ていただきましようか。また紙に書きま  
すと、

但恐城市飲 ただ 城市は飲び

不知田野愴 でんや 田野の愴いたむを知ららざるを。

「城市」と「田野」がペアになっています。「城市」とは都市のことです。日本語で「城<sup>しろ</sup>」というと天守閣のあるあの姿を思い浮かべるでしょうけれど、昔の中国の都市は防御のために全体が城壁に囲まれていたので、「城」は都市を指します。日本でも戦国時代の終わりに、豊臣秀吉が攻めてくるのに備えて、北条氏は総延長9キロもの土塁と空堀を築いて、小田原の町全体をすっぽり囲いました。それは中国の都市のあり方とやや似ていたと言えるでしょうか。

——「城市は歓び、田野は愴む」っていうのは、地方の衰退が深刻化している時期に、オリンピックを開くのを理由にやたらと東京に投資がなされる現状を、なんか言い当てていると感じられなくもないかもね。「復興五輪」って言ってたはずなのに。なんにもしていないボクが、評論家気取りで偉そうに言ってもまるつき

り意味ないんだけどさ。

① 許州では、官僚のあり方について考えるきっかけとなるもう一つのことがありました。4人のスーパースターの1人である范仲淹はんちゅうえんの次男の范純仁はんじゆんじんに会ったのです。范仲淹は私が17歳のときに亡くなっていて、4人のなかでただ1人お会いすることができませんでした。范純仁は私より9歳年長で、11年前に科挙に合格し、このときは許州の副知事格でした。

これより40年後に書いた文章がありますので、ざっと聞いていただきましようか。

慶暦三年けいれきのこと、私は八歳で土地の学校に入った。間もなく、ある文士が都から

せきかい  
けいれきせいとして

石介の作った「慶歴聖徳の詩」を携えてきた。学校の先生がそれを読んでいるのを私は横からのぞき見た。それはいまとくに優れる十一人を讃える詩だと聞いて、「どのような方々なのですか」と尋ねた。「君のような子どもにはまだわかるまい」と先生は言った。「それが天の上の人であるのならわからないということもあるでしょう。でも、同じ地上の人であるのならわからないことはないはずです」。私の返答に先生は驚き、その詩を読んでくれた。そして、「とくに韓琦かんき、范仲淹はんちゅうえん、富弼ふひつ、歐陽脩の四人は人傑である」と言った。このときはまだきちんと理解できたわけではなかったが、四人の名ははっきりと記憶に刻まれた。

二十二歳のときに都に行くと、范仲淹はすでに亡くなっていて、歐陽脩が記した墓誌を読んで、「その人のあることを知って十五年、しかし、ついにお顔を見ることがかかなわなかったのは運命なのだろうか」と嘆き悲しんだ。私は科擧に合格し、

初めて歐陽脩に会い、その紹介で韓琦とも富弼とも会えた。三人は口を揃えて「残念なのは君が范仲淹に会えなかったことだ」と私に言った。

それから三年後に私は許州で范純仁はんじゆんねいに会い、また六年後に都でその弟の范純礼はんじゆんれいに

会い、さらに十一年後に末の弟の范純粹はんじゆんすいと同僚になった。みなすぐに旧知の仲の

ようになった。私は范兄弟から父上の遺稿を託され、文集を編集して、それに序文を添えてほしいと頼まれた。それから十三年が経っていまようやくその約束を果たせるに至った。

范仲淹の功績と徳は、その文章があつて初めて世に知れるのではない。その文章は、序文があつて初めて世に遺されるのではない。それでも文集を編集し序文を記すのをあえて辞退しないのは、八歳で范仲淹を敬うことを知って四十七年になり、他の三傑とは交わりを結ぶことができたのに、范仲淹一人とは知り合えずに

いたのを平生の恨みとし、その人の書いた文章の脇に我が名を掲げることその人の門下生の最後の一人であるかのようになれるのならば、ついに願いを叶えたのに近かろうかと思うからだ。

いにしへの立派な人々が天下のために貢献した事績を見ると、それを為しとげた基本的な姿勢は、国に仕えてから学んで得たものではなく、庶民のなかで暮らしていたときから身に備わっていたものだった。漢かんの劉邦りゅうほうが天下を平定するのを助けた韓信かんしんは、劉邦と会った最初さいしょのときすでに遠い見通しを持っていたし、諸葛孔明も草庵に尋ねてきた蜀りゅうびの劉備と初めて会ったときすぐに何をすべきかを語り、終生それを貫いた。人に尋ね、聞いたことを試し、成功したらよしとするようなことではなかったのである。

范仲淹は母上が亡くなって喪に服していた間に、天下のありさまを見て、いかに

して民衆に泰平をもたらしかをつらつら考え、一万字に及ぶ文章を書いてときの宰相に送った。天下の人々はその文章を読んだ。後に范仲淹が国政の改革に取り組んで副宰相にまでなっていたこと、あるいは平生に為したところのものは、みなこの文章に記されていた通りであった。

范仲淹の遺稿二十巻をここに編み、詩賦は二百六十八、文章は百六十五に及ぶ。これらを見れば、范仲淹が仁義礼楽忠信孝悌を思うのは、飢えて食するのを思い、渴いて飲むのを思うのと同じで、片時も忘れようとしてできなかったことであつたというのがわかる。その心は火のように熱く、その情は水のように潤い、天性からしてそのようであつた。慰めに、あるいは戯れに、もしくはは瞬時に作つた詩文であっても、その天性から出たものであるから、天下の人々はその真心に打たれ、争つて師として尊ぶのである。



孔子は「徳ある者には必ずしかるべき言葉がある」と言った。それはしかるべき言葉が初めにあってその人の口から出てくるのではない。徳のある人の口が発するからしかるべき言葉となるのである。

——えーと、最初のところ書いてあった少年時代のことは前に聞かせてもらったよね。いろいろと数字が出てきたのを足し算すると、これはトバー君が55歳のころに書いたってことかな？ 8歳で憧れた人だけに、思いも深いものがあつたんだろうけど、やっぱこれも過剰な称賛と違う？ 遺族に頼まれたから、さすがにそうなったのかなあ。

ト

いえ、范仲淹はまさしくここに記した通りの人でした。過剰ではなく、むしろ

る足りないくらいです。私たち後進の者にとって、「争って師として尊ぶ」、永遠の師匠でした。

こんな歌は、あなたはご存知ないでしょうか。

〱柴刈り繩わらじない草鞋わらじをつくり、

親の手すを助け弟おとこを世話し、

兄弟仲よく孝行つくす、

手本にのみやきんじろうは二宮金次郎。

——またいきなり大きな声で歌って……恥ずかしいからやめてよ。えーと、聞いたことないけど、二宮金次郎の歌ってこと？ 薪を背負って、元祖歩きスマホミ

たいな格好の金次郎の銅像はどっかで見たことあるけど。

㊦ 私たちの時代には、こんなふうに歌っていました。

天下に先駆け心に憂い、

民の手を助け喜ぶを待ち、

天下に後れて楽しむをなす、

手本は一徹、范仲淹。

——また歌っちゃって……今日はどういふこと？ この歌は100パーウソだよ  
ね。そんなのあるはずないもの。

㊦ 二宮金次郎は12歳のときに父を喪い、范仲淹は2歳のときに父を喪いました。范仲淹の母は女手一つでは子を育てることはおろか生きることさえできないと、朱家しゅに嫁ぎ直しました。「貞女は二夫じふを見ずまみ」とか言って、夫が死んでも、貞淑な女性は再婚しないというのが、中国の昔からの決まりだったみたいにいわれたりしていますが、少なくとも私たちの時代にはそのようなことはありませんでした。最初の結婚は親同士が決めるものであっても、再婚の場合は女性が自分で相手を決めていいというルールさえありました。

さきほど育児に関していかにも封建男子のようなことを私は言いました。すべてがそのような調子だったわけではありません。女性がどのような境遇に置かれていたのかということにはなかなか複雑な面がありますので、折に触れて少しず

つお話ししていきたいと思えます。

范仲淹は朱家の子として成長し、自分のもとの姓が范であったと知ったのは10歳を超えてからでした。我が手で范の家を再び興すには科挙に合格して独り立ちするしかないと考え、まさしく飲まず食わずの猛勉強をして、27歳で合格しました。

私の文章にあった、母が亡くなって喪に服していた時期とは、38歳のころです。それまで范仲淹は地方官として勤め、大きな事績としては泰州たいの防潮堤の建設がありました。泰州は海塩の生産が盛んな海辺の町で、昔の堤防がすっかり傷んで、毎年秋になると高潮で大きな被害が生じていました。范仲淹は全長150里にわたる防潮堤を計画し、費用がかかりすぎるとの反対意見を押し切って着工しました。運悪く、工事が始まったばかりのときに洪水が建設現場を襲い、10

0人余りもの死者が出てしまいました。そのとき秦州の近くにいた友人の滕宗諒とうそうりょうが事態の收拾を手助けしたことで、混乱が拡大せずすみみました。范仲淹はくじけることなく工事の続行を朝廷に訴え、それは認められ、母の喪に服するために秦州を離れた後になって防潮堤は完成しました。高潮の害が取り除かれた町の人々は長く范仲淹に感謝したのです。

范仲淹は喪の期間中に国政の改革案を錬り、それから20年ほど後、私が8歳のときに副宰相となって実際の改革に取り組みました。しかし、反対する勢力は頑健に抵抗しました。改革の一翼をになった友人の滕宗諒は、公金の使途に不明なところがあるという嫌疑をかけられて地方に放り出されるなど、改革派は次々と切り崩されていきました。そのような混乱を見て皇帝は改革への情熱を失い、范仲淹も地方に転出せざるを得なくなり、改革は頓挫したのです。

では、改革が失敗した後で范仲淹も書いた文章を聞いていただきましょう。たぶんあなたが寝てばかりいた漢文の教科書にも載っていたのではないのでしょうか。それほどに有名な文章です。

——范仲淹っていう名は、ぜんぜん記憶にないんだよなあ。教科書に載るのって、いいのか悪いのかわかんなかったりするよね。選ぶ方は、これは大切なものだから高校生にもぜひ知ってもらいたいということなんだろうけど、教科書に載ってさ、テストなんかに出されたりすると、それだけで、かったるくてもういやになっちゃうんだよなあ。もしも、ジョン・クレアの詩が英語の教科書なんかに載ってたなら、完全に読む気をなくしていただろうね。難しい英語だしね。こんなふうに思うのって、ボクがひねくれているだけなんだろうけどさ。

㊦ さきほどの私の文章で、ある文士が都から石介の詩を携えてきたと言いました。「文士」の原文は「士」の一字です。「士」とは何かといいますと、政治に携わる、もしくは関わる意志のある知識人ないし読書人といったらいいでしょうか。古くは孔子が理想と考えた周の時代の制度にさかのぼります。当時の支配階級は、上から、王、諸侯、卿、けい大夫、たいふ士に区分されていきました。支配階級のなかでは下に位置して、行政の実務を担当する官僚群が士です。孔子は、士が豊かな知識と高い志を持っていなければならないと、後半生はその教育に全精力を注いだのでした。とくに庶民から士の仲間に入ろうとする人を対象としたのが大事なところですよ。

宋の時代になると大夫と士を合せた「士大夫」しだいふという言葉がさかんに言われる



ようになり、科挙に合格した人々およびそれに準じる人々を指すようになりました。孔子の理念を受け継いで、国のため民のために働こうとの志をもって学問に励んだ人々が士大夫です。私の文章で「士」と書いたのはこの「士大夫」の略です。

これから申し上げる范仲淹の文章は、左遷された滕宗諒の依頼に応えて書いたものです。最後のところに、士大夫の心構えが簡潔に記されています。

滕宗諒が巴陵郡はりょうの知事に左遷されて一年が経つと、滕宗諒は地域の事情に通じ、人々の間に和が生じて、すたれていた伝統がよみがえるようになった。滕宗諒は、この地にある最も大切な文化遺産である岳陽楼がくようろうの修復を思い立ち、過去に行われた修復よりも規模を大きくして、唐からいまに至るまでに岳陽楼で詠まれた優れ

た詩賦を樓の壁に刻むことにした。

私は記念の文章を書くよう頼まれ、巴陵とはどのようなところであろうかと考えた。巴陵が天下に勝れているところは、何と言っても岳陽樓から臨む洞庭湖のすばらしさにあるだろう。湖は遠くの山を包み込み、長江を呑み込み、浩浩湯湯こうこうとうとうとして際限なく広がり、朝日の輝くとき、夕日のかげるとき、氣象が千変万化するごとにその姿を変える。その壮大な風景が岳陽樓からすべて見られることは、先人の詩賦に歌われる通りである。

北からも南からも人々は岳陽樓にきて洞庭湖の風光を見ようとする。そのときの人々の思いは誰しも変わりが無いだろう。もしも長雨がずっと続き、暗い風がうなり声を上げ、濁った浪が空に届かんばかりで、山岳の形がそれに隠されてしまいうようだと、旅の商人は進めず、船の帆柱は傾き、舵は碎け、迫りくる夕暮れに

は、虎が吼える声、猿が鳴く声が異様に響くばかりとなる。そのようなときにこの楼に登れば、遠く離れた故郷を想い、あるいは都で自分を誇る声そしを恐れ、見るものすべてに感じ入って悲しむであろう。もしも春のやわらかな陽気に日差しが明るく、上も下も天からの光に満たされて、湖は青のひと色となり、渚に鷗が集まり、水中に魚が遊び、岸边の木や草が目にあおあおと、鼻によい香りがし、雲が淡くただよい、そして月が千里の波を輝かせて、漁師の唄声があちこちから聞こえてもくる。そのようなときにこの楼に登れば、心はのびやかになり、世の栄誉も恥辱もすべて忘れ、酒を手にとって風に臨み、その喜びはどこまでも広がっていくであろう。

人々の心はこの二つだけであろうか。私はかつていにしえの真心にあふれる士人の心に思索を巡らせ、この二つとは異なるものを発見した。それは何であるのか。

自分の外にあるものを喜びの種とはせず、自分の内にあるものを悲しみの種とはしない。国家の高い地位にあれば野の民のことを憂い、遠く野に置かれれば国の主のことを憂う。国家枢要の地位に進んでも憂い、身を引いても憂う。憂うばかりで一体いつ楽しむのか。真心にあふれる士人は、天下の人々が憂う前に必ず先んじて憂い、天下の人々が楽しむのおに後れて楽しむのである。このような人がいなかったならば、私は誰に心を寄せたらよいのだろうか。

だから、よろしいか、

〽天下に先駆け心に憂い、

民の手を助け喜ぶを待ち、

天下に後おくれて楽しみをなす、

手本は一徹、范仲淹。

——あちやー、また歌っちゃった。トバー君、呑みすぎ？

㊦ 范仲淹のいう士大夫の心構えを縮めていうと「先憂後樂せんゆうこうらく」です。「真心にあ

ふれる士人」と訳したのは「仁人じんじん」という語です。「仁」は儒学の最も大切な概念

で、それを全得して実践している人が仁人です。仁人は、天下の直面する問題に真つ先に気付いて憂い、その問題の解決に真つ先に取り組み、解決されて天下の人々がみな楽しみを得たのを見て、それからようやく自分も楽しむのです。范仲淹はまさしくそれをした人で、許州の西湖を作った人はまるで逆だったのです。

——漢文の教科書にあったかどうかは覚えてないけど、トバー君から聞くと、なるほど教科書に載せたくなるような文章だっていうことがわかるよ。高校生の教科書じゃなくて、議員さんたちに読ませる教科書の方がいいね。国も地方もどうしようもない議員さんがごろごろしてんだもの。

㊦ 范仲淹は立派な志をもち、国政改革の理念はまことに立派なものでありました。だから成功するわけではないというのが世の中の悲しさです。范仲淹の改革は実際の成果が乏しいままに終わってしまいました。

——政治的に大成功していたら、この文章を書く機会はなかったのだろうか、

何がいいのかはよくわからないよね。

㊦ 范仲淹は副宰相を退いてからは、地方官として各地を転々とし、防潮堤の建設のように、地方行政において「先憂後樂」の本領を大いに發揮して、最後は重い病気にかかりながらも新たな任地へと向かう途中で亡くなったのでした。

話が長くなりましたが、これから自分が官僚になるに際して、手本はもちろん范仲淹でした。しかし、その一方で、世捨て人への憧れがあり、本性が鹿である私が官界でやっていけるのかという不安がありました。老獪な政治家は、私のように思うことをすぐに言葉として外に出したりはしません。

かつての乱れた時代に、罨だらけの政界において身を全うした1人の人物がいました。次にその人の生地を訪ねたときの詩を聞いていただいて都への旅のしめ

くくりとしたいと思います。

あつ、そうでした。これは、うっかりしていました。この前、あなたに間違っ  
たことを言ってしまいました。

——えつ、なんのこと？

㊦ 900年以上も経つと、さすがに記憶があやしくなります。あなたとは以前  
に大雪の日に酒を酌み交わしたであろうかと言いました。その時期を間違えてい  
ました。あれは都に着いてから後のことではなくて、都への旅の終わりのときで  
した。いまからお話する尉氏うゑしという町を訪ねるために、私は父や弟とは別行動を  
とって、季節はずれの大雪に遇ってその町で足止めを食らったのです。私は一



人だったので、都への旅とは別であったと勘違いしたのでした。

お酒に強いとはいえない私が、こうしてほろ酔いかげんで話しているので、これに限らず思い違いを口にしてしまうことも多々ありましょう。もしもあなたがひよっとして私について書かれた本を調べるなどして、私が申し上げることと食い違いがあったりしたならば、どうぞ遠慮なく指摘してください。本人が言うのが正しいだろうなどは安直に思わないでいただきたいと思えます。

——調べるなんて気はさらさらないよ。漢字だらけの本なんか見たくないもの。でも、ボクの叔父さんならやりかねないかもな。何しろいまだにトーマー君が本物の蘇東坡とは思えないなんて、わけのわかんないことを言ってんだもの。失礼

だよ。ちょっとした間違いでもあったら、それ見たことかと、鬼の首を取ったように騒ぎ立てたりするかもなあ。B型人間って、妙なところで辛気臭くこったりするから。

㊦ 乱世においてもものを言わなかった人は阮籍げんせきです。より正確には、ものを言わ

なかったのではなくて、他人にわかるようには言わなかったのです。阮籍には「詠懐詩」という一連の詩があり、それは文字通り胸の内を詠んだものです。胸にあるもやもやをもやもやのままに詠んで、もやもやのもとになった具体的な事情については一切触れていません。ここまで聞いていただいた私の詩とは趣きかなり異なります。私の詩ではいつどこで何について詠んだのかという具体的な事情がどれも明らかです。

阮籍の詩を一つだけサンプルとして聞いていただきましょうか。

一つの昼が過ぎて一つの夕べとなり、

一つの夕べが過ぎて一つの朝となる。

いつのまにか顔の様子が改まり、

いつのまにか心の状態が損なわれる。

胸の内に熱い火があり、

変化が変化を招き、

万事におさまりどころがなく、

知恵が豊かでないことに苦しまされる。

ひたすら恐れるのは、

一瞬の風に吹かれて魂がただよい出てしまうことだ。

私の一生は薄い氷を踏んでいるようなもの。

胸の熱い火で心が焼けただれるのを誰にも知られずにいて。

——あのですね、これって、なんかとつてもわかるような気がするんだけど。つまり、誰にも理解されずにいる自分の苦しみを歌っているってことだよ。言うてみれば、なんかとつてもジョン・クレア的かも。

① 私の詩よりもお気に召したでしょうか。「薄い氷を踏んでいる」と詠まなければならなかった事情は何であったのか阮籍は決して語りません。だからこそ時を経るとかえってわかりやすく感じられるようになるのかもしれない。

阮籍は諸葛孔明よりも30年ほど後輩で、羊祜よりも10歳ほど年長でした。

諸葛孔明も羊祜も天下のために権力者に仕える道を選んだのに対して、阮籍は権力者からの誘いをいくら受けても酒びたりになって拒み続けました。

それでは、私の詩です。

阮籍は達人にして狂人だった。

世を逃れ、言葉を発しなかった。

高い志は万物の上に出て、

世俗の論に関わらなかった。

胸の内に意気が充満すると、

独り高台に登り、

身もだえし、

息とともにそれを吐き出した。

阮籍の激越な思いは、

大地を揺り動かさんばかりであった。

酔っては昏々と眠り、醒めては嘔うそいた。

乱世に生きながら己を貫いたことにおいて、

阮籍に比べられる者がほかに誰かいただろうか。

このように歌ったとき、私は阮籍の苦悩を想像しただけで、相応する実体験はありませんでした。ずっと後になって、再び阮籍に思いを寄せたときのことはいつかお話するとしましょう。

——また予告編か。それはもう毎度のことだから、いちいち気にしないことしたけど、阮籍っていう人の詩にはちよつと興味があるかも。中国の詩もいろいろつてことか。

㊦ 私たちは2月の中旬に都に到着しました。荊州を経てから1カ月半、故郷を出てから4カ月余りの旅でした。

——都っていうのはどういうところだったの？

㊦ 日本のあなたにとってわかりやすくいうと、江戸の町を数百年前にタイムス

リップさせたと思っただいてもさほどの外れではないでしょう。当時の地球上で最も繁華な町であったのは間違いありません。

とうけいかいほう

べんけい

宋の都は東京開封府で、汴京べんけいと呼ぶこともあります。唐の都の長安が日本の平安京の手本になったのはよく知られていますが、開封が江戸の手本になったということはありません。開封はその成り立ちからして他の都市の手本にはなりにくいところがありました。長安は、天然の要害によって守られているという地理的条件の優れた場所を選び、軍事的、政治的な都市として計画されて作られた都市でした。東西南北に走る街路によって碁盤のように整然と町が区分けされていたのはまさしく計画都市ならではのでした。皇居、行政区、商業区、宗教施設などの配置もきちんと計画されました。しかし、計画が壮大すぎて、ほとんど住人のいない野原同然の街区も少なからずあったといえます。



開封は黄河がつくった大平野のなかにあり、防御にはまったく不向きな地理条件で、宋の初めにはずっと守りやすい洛陽らくようへの遷都が取り沙汰されたこともあり、また。そうならなかったのは、開封が経済都市として群を抜いた存在になっていて、その力を抜きに宋という国家の運営ができないまでになっていったからです。開封には古くから相国寺そうこくじというお寺があり、その境内で定期的に市いちが開かれていました。開封のすぐ近くを黄河と長江を結ぶ大運河が通り、遠くからでも商人が集まってきやすいことから、その市は賑わいをみせ、相国寺のまわりに自然と町ができて行きました。

—— 門前町ってやつだね。



民間の力で発展してきた開封の有する潜在的パワーに目を付けたのが朱

ぜんちゆう

全忠でした。朱全忠は唐の皇帝から「全忠」という立派な名をもらいながら、「忠」

とはまったく逆に、唐王朝にとどめを刺した人物で、歴史物語などでは悪役中の悪役として描かれるのがお定まりとなっています。しかし、歴史の流れを見据える先見性があつたのは間違いなく、開封を己の根拠地として選び、相国寺の門前町を囲むように城壁を築き、商人を保護し、その経済力をバックに勢力の拡大を図つたのでした。

その後、朱全忠が作つた城壁の内側だけではどうにも手狭になると、外側に大きく城壁を巡らして都市域を拡大し、それも手狭となるとまた拡大するといったことを繰り返して宋の時代に及びました。街路は成り行きで延びて行ったために長安とは異なりまったくもって整然としておらず、行政区も商業区も宗教施設も

そこかしこで混じり合い、実に雑多な都市でありました。長安のような野原同然の土地などはなく、人々は常にひしめきあつて暮らし、都のそこかしこに盛り場が存在しました。要するに上からの計画で作られた都市ではなくて、民間のエネルギーがほとぼしるままに巨大都市へと発展したのです。

——もしかすると、いま発展しつつある東南アジアの大都市のような感じかな。

㊦ 現代の都市においてその発展に欠かせない一つの条件が交通インフラで、開封では水運でありました。開封のなかを四つの川が貫き、各所に運河が掘られ、全国から大小さまざまな船が自在に都の中心部へと入ってきていました。

私が旅の途中で、月の夜に夢で都に飛んで行ったという詩を詠んだのを憶えて

いるでしょうか。町のなかを川が流れれば洪水はつきものです。悲惨な水害で零落する民衆がいる一方で、人の不幸をチャンスに変えてのし上がる者もいました。私は初めて上京してすぐにそのような現実を見て、都には親しみを感ぜられなくなったようです。いま顧みても、都にはいい思い出がありません。世界一繁華な都市で、その繁栄を謳歌するというようなことはなかったのです。私を軟派とご覧になったあなたには意外でありませうか。それはやはり鹿の本性によったものなのでしょうか。

では、都に着いてからのことは次回といたしましょう。

イノ君が「鬼の首を取ったように騒ぎ立てる」と言ったところで、私はひとり

苦笑し、顔をあからめた。

確かに、事実関係の明らかな誤りでもあれば、それをもってトバー君なる人物がいかさまだと、イノ君に水戸黄門の印籠のように突きつけてやろうと思っていた。実際に蘇東坡本人とは何か異なるのではないかと感じるところがこれまでもあり、いつか詳しく調べてみなければと思っていた。

しかし、書物に書いてあることが正しいとは限らないだろう。それに、トバー君が正しかろうが正しくなからうが、ドン・キホーテが遍歴の騎士であると思いで話したことを楽しんで聞いたスペインの村人たちに習って、トバー君の雄弁が耳の脇を流れて行くのをそのままにしておくのが賢明だということもたぶんあるのだろう。